

私は多くの兵隊を

五十嵐 沙千子

私は多くの兵隊 (Soldaten) を見る。だが私が見たいのは多くの戦士 (Kriegsmänner) なのだ! (Z.54)

ツァラトゥストラはこう言う。私がここでこれから書いていきたいと思うのは、兵隊の服従と戦士の服従について、あるいは背中を駱駝の瘤のように軋ませる服従とあらゆる重さを取り去る服従について、その二つの服従についてである。

だが、戦士は服従するのか? むしろ戦士は服従を拒否するために彼らの戦いを戦うのではないのか? あるいは彼らは誰と一緒に戦うのか? あるいは誰のために?

戦士は孤独であること、ひとりで戦士であることもありうる。だが兵隊はひとりで兵隊であることはできない。ひとりで歩いている兵隊は、隊から離れた兵隊、離れてしまった部分、全体を欠いてしまった部分でしかない。ひとりで歩いている兵隊はもはや兵隊ではない。

あるいはこう聞いてもいいかもしれない、彼らを招集する (Versammlung) のは誰か? と。兵隊を招集するのは誰か? そして戦士を招集する者は誰か?

またあるいはこう聞けるだろう、彼らの友は誰か? そしてこれは次の問いと同義である。彼らの敵は誰か?、という問いと。

1.

背中を駱駝の瘤のように軋ませる服従は兵隊のものである。

兵隊は駆り出される。駆るというのは動物を追い立てることである。そのように兵隊は駆り出される。意に反して、それまでの日常生活に未練を残したまま、首に轡をつけられて兵隊たちは駆り出される。

駆り出された彼らは、自分のそれまでの生活を変えるために駆り出されたのではない。むしろ彼らは自分の生活を変えないために、自分の生活を守るために、駆り出されるのである。彼らは自分を、そして自分の生活を保つために戦地に行くのだ。

だから兵隊に、何のためにあなたは戦っているのか、と聞いてはならない。彼らはそもそも戦いたくないのだから。兵隊たちはそもそも戦ってさえいない。

彼らはただ従っているだけである。兵隊として駆り集められたのも、隊に分けられたのも、戦地に送られたのも、すべて決められたことである。どこに行くのか、いつ行くのか、そこで何をするのか、それらはすべて決められているのだ。それに彼らは従っているだけ

である。だから彼らは戦っているのではない。彼らはただ服従しているだけ、彼らは服従しなければならず、ただ服従をしているのである。

それは彼らが働いている（arbeiten）ということである。

だがツァラトゥストラは言う。

私が君たちに勧めるのは、労働（Arbeit）ではない。私が勧めるのは戦い（Kampf）なのだ。（Z.55）

兵隊たちは働いている。彼らは黙って服従している＝働いている。それが嫌だとかやりたくないとか、あるいはそれが好きだと言うことも彼らには禁止されている。あるいは彼らは自ら禁じている。いったい、与えられた仕事を拒否するなど、どうしてできるだろう？ 仕事を選ぶなどということがどうして自分にできるだろう？ 自分に与えられた仕事はどういうものかを理解することさえ、彼らにはほど遠いことなのだ。兵隊たちはただ駆り出され、配置され、背囊を与えられ、その日に行く場所とその日の仕事を与えられ、黙って歩いて行くのである。

彼らは黙って歩いて行く。彼らにいったい何を言うことがあるだろう？ そして、どんなことがあろうと彼らはその背囊を下ろそうとは思わないのだ。彼らにできるのはただ、鵜呑みにすることだけ、自分の意志と感情を切り離して、自分の意志と感情を自分自身から切り離して、ただ黙って、昨日も今日も明日も下を向いて重い背囊を背負って歩いて行くことだけである。できる限り自分を自分から切り離すこと、できれば何も感じずに労働をこなしていくこと、自分をできる限り殺すこと、それは彼らが「良い」兵隊であるために必要なことである。

だとすれば彼らは駱駝に似ている。

駱駝も黙っている。黙って自分の背囊＝瘤を死ぬまで運んでいく。駱駝は吠えも泣きもしないでただ黙って歩いて行く。駱駝も彼の背囊を決して下ろそうとは思わないだろう。彼らが下ろそうと思わないのは、瘤が自分の体の一部だから、それが自分自身の体だからに他ならない。それは与えられた重荷ではないのだ。むしろこの瘤こそ駱駝であることの証、自分が自分であることの証なのである。それをいったいどうして下ろそうなどと思うだろう？

駱駝と兵隊はこうして黙って歩いて行く。それは正しく労働のかたちである。重さに背中を軋ませながら、彼らがつぶやくのは「そういうものだ」である。仕方がない、人生とはそういうものだ、それは誰もががしていること、自分だけが免れるわけにはいかないこと、それが私の仕事なのだ。だいたい、私にどうすることができると言うのだ？ そもそも私にはそうしかできないではないか？

もしそうしなかったら？ もしそうしなかったら、考えるのも恐ろしいことだが、私は生きていけないだろう。私は死んでしまうだろう。私は隊から、そして私自身の生活から追い出されてしまうだろう。第一、私は兵隊＝駱駝なのだ。瘤があつてこそその駱駝である。もし瘤を下ろしたら、私は駱駝ではなくなってしまうばかりか、命まで失ってしまうだろう。それはあまりにも明白なことだ。

だとしたら、それを下ろすことはできない。瘤を下ろせ！などと呼びかける者がいたとしたら？ それは狂人の声である。その声を聞くなどということがいったいどうしてできるだろう？ そもそも、死んでしまう以前に、私は瘤を下ろせ！という声に戸惑うだろう。いったい瘤を下ろすというのはどういうことなのか？ いったいそれはどういう意味なのか？ 反抗しろということなのか？ そんな声は聞いてはいけない。それは恐ろしいこと、自分の命を失いかねない危険なことなのだ・・・

こうして駱駝は黙って歩いて行く。駱駝は耳を閉じて、黙って歩いて行く。

瘤を背負っていく限り、駱駝は無事に歩いて行けるだろう。黙って軍隊に従い黙って戦争という労働を続けていく限り、兵隊は無事に生きていくことができるだろう。

だが、そうだとすれば、駱駝が服従するのは、あるいは駱駝を支配するのは、駱駝を配置した者ではない。私が服従するのは、私の生き延びへの私自身の意志なのであり、死を運ぶ機関である軍隊はこうした無数の私の生き延びの意志の単数性によって統一され実体化されたものなのである。

だが、耳を閉じるということは可能なのか？

兵隊が兵隊として無事に生きていく？ それは悪いジョークではないか？

耳は開いている。耳はいつも開いているのだ。

2.

われわれが他者とつながる他の器官-----目や口-----をわれわれは自由に閉ざすことができるが、耳はいつでも開いている。耳はいつでも開いている唯一の器官である。それはわれわれの存在論的前提でさえある。

だがもちろんわれわれは聞かないということができる。聞き逃す、あるいは聞かないということ、「正しく聞いていなかった」ということは、われわれにとって常に可能である。そして「正しく聞かない」ということはわれわれの生き延びの手法でもあるのだ。

そもそもわれわれは、既に分かっていることしか「聞く」ことができない。われわれはわれわれに分かっていることを「聞く」のだ。・・・例えば、何かの音がする、とする。だがわれわれに聞こえてくる音は、それが何の音であるか、あらかじめ分かっている音である。予め分かっている意味をわれわれは「聞く」のである。その「予」の構造の中にわれわれはいる。そうハイデガーは言う。

「さしあたって」われわれが聞くのは、けっしてノイズや音のざわめきではなく、軋む車とかオートバイとかである。ひとは、行軍中の縦隊、北風、木を叩く啄木鳥、パチパチという火を聞くのである。「純粋なノイズ」を「聞く」ためには、きわめて人為的な複雑な態度をとる必要がすでにある。だが、われわれがさしあたってオートバイや車を聞くということは、現存在が、世界内存在として、そのつどすでに世界内部的な道具的存在者のもとに引き留まっているのであって、さしあたって「感覚」の下に引き留まっているのでは全然ないということ、このことの現象的な証拠である。

(SuZ. 163f. 強調はハイデガー)

だとすれば、私の耳は開いているのに私が聞いているわけではなく、私の耳が聞いているわけではない、ということになる。あるいは私は「聞く」ことから、あるいは「私が聞くこと」から、あるいは「私に分かること」から排除されている、ともいえる。私には分ける権能が与えられていないのだ。分かっていることしか分からない、というのは、私は私に先立って既にわれわれによって分けられていることしか分けることができない、ということに他ならない。

だが、すでに分かっていること = 分けられていること = 分有していることしか聞けないのだとすれば、われわれは、まだ聞いたことのないもの、新しい声、他なる声を聞いても、聞こえないか、あるいは既に分かっている声として聞き「取って」しまうかのいずれかということになる。だからわれわれはどんな他なる声も、もうこれまでにさんざん語られてきた言葉、飽きるほど繰り返されてきた誰もが語るおしゃべりの中に分節してしまうのだ。あなたの言うどんなことも、それはもう知っている、もう分かっている、それはもう聞いたことのあることだ、私がこれまでさんざん耳にしてきたおしゃべりだ、と礼儀正しく耳を傾けながら私は「分ける」だろう。

そしてそのことによって、私はあなたを、他なる声を閉鎖するのである。

ハイデガーは言う。

したがっておしゃべりは・・・(略)・・・はじめから一つの閉鎖なのである。

こうした閉鎖は、次のことによって改めて甚だしくなる。すなわち、語りの糸口とされた手がかりの了解内容がそこでは達成されているのだと思い間違えられたおしゃべりが、こうした思い違いを根拠にして、あらゆる新しい発問や全ての対決を抑止し、特有の仕方では押さえつけ遅らせるというのがそれである。

現存在においてはおしゃべりのこうした被解釈性は、そのつどすでに確定されている。多くのことをわれわれは、さしあたってこういう仕方では知るのであり、そうした平均的な了解内容を決して越え出ないものも少なくない。こうした日常性の被解釈性の中へと入り込んで現存在はさしあたって生育していくのだが、そこから現存在は決して抜け出すことはできない。(SuZ.169 傍点は引用者)

3.

おしゃべりは閉鎖である。そして全てのおしゃべりは被解釈性において確定する。そこにあるすべてのものがすでに解釈されている。すべてのものはすでに = 予め = もう解釈されていて、既に名付けられ、配置されている。

そういうものの世界の中にわれわれ現存在は住んでいる。われわれが目にするもののできるものは全て、われわれが知っているもの、その名を呼ぶことのできるもの、われわれが語ることができるもの、われわれのものである。

了解されたものは、あるものとしてのあるものという構造を持っている……(略)……それは何かの用途のためのものである。用途性を指示することは単純にあるものを名指すことではなく、むしろ名指されたものは、問題になっているものがそのものとして受けとられるべき当のものとして了解されるのである。了解において開示されたもの、つまり了解されたものは、そのものに即してそのものの「何かとして」ということが表立って目立ちうるといふに、常に既に近づきうるものになっている。この「として」は、了解されたものが表立つことの構造をなしているものであり、解釈を構成しているのである。(SuZ.149 傍点引用者)

だからこそわれわれはわれわれの身の回りのものを「見る」ことができるのだ。われわれが何かを「見る」というのは、その何かを「机とかドアとか橋として「見て取る」」(SuZ.149) ことに他ならない。逆に言えばわれわれの身の回りにあるものは、われわれにとって「机とかドアとか橋として」しか存在していない＝存在し得ないのだ。そして「机とかドアとか橋として」存在しているものは見えるものは、その「机とかドアとか橋として」として使われるというその用途において存在しているものは見えるものなのである。だとすれば、われわれは「机」それ自体を見ているのではなくて「机」という用途を見ているのであり、「机」は、「机」として使われるもの＝用途として存在しているということになる。また、だからこそわれわれは「クキエ」という音ではなく「ツクエ」という音を理解し、「机」を「教室」の中に適切に配置することができるのであり、またその「教室」のなかで足りないものは何か……それは「椅子」であったり「チョーク」であったりあるいは「黒板」であったりしうるのだが……を配慮＝配置することもできるのである。それが、われわれが「そこ」がどんな場所か、「そこ」が何かを理解している＝分かっている＝弁えているということである。

われわれが「そこ」に配置するのは物だけではない。当然のことながら「机」と「椅子」と「チョーク」と「黒板」だけでは「教室」を構成することはできない。「教室」を配慮しつつ見ることでできるわれわれは、そこに必要な道具＝あるべきもの、つまり「教師」や「生徒」をも配置するのだ。それが物であれ人であれ、われわれは「そこ」にあるべきものを配置することができる。それが「そこ」を分節すること、「そこ」を「どこ」として分節し＝分かること、われわれが「そこ」が「どこ」なのかを「分かる」ことなのだ。そこにもものと人との区分はない。そしてそこには自分と他人との区別もない。それらは等しく「そこ」を構成するのに必要なもの＝あるべきものである。そしてそれらは等しく、そのもの自体としてではなくそれが属するその「そこ」の方から自己の存在の可能性のすべてを与えられている。「道具的存在者は、つねにすでに、適所全体性のほうから了解される」(SuZ.150) のだ。その構造の中にわれわれは自分を「として」配置し、他者を「として」配置する。われわれの身の回りにあるあらゆるものがどんなものであれわれわれにとって「(机とかドアとか橋)として」しか存在していない＝存在し得ないのと同様に、この私自身もそして私の他者も、すべて、われわれにとっては「として」の様態の中でしか存在していない＝存在し得ない道具的存在者なのである。

実際、われわれが用いる呼称＝役割名はそれを体現したものである。他者を指し、また私自身を指す呼称は、「机」という名前が初めて「机」を存在させ得る＝机を「机」とし

てしか存在し得ない＝机にそれ以外の仕方^で存在する可能性を拒絶する、のと全く同じ構造において、私＝他者を、「として」存在させ、私＝他者に、存在を与え、私＝他者を、「として」の中に拘束し、私＝他者の他なる可能性を、つまりそれ以外の仕方^で存在する可能性を、私＝他者に拒絶する。

あるいはこうも言えるだろう。その呼称はつねに私に先立つもの、私の呼称はつねに私に先立つ私の呼称であるとすれば、私はつねに、私より先にその呼称を所有する者たち＝われわれに所有されているのだ、私＝他者の在り方は私＝他者に先立って決定されているのだ、あるいは私は、私の呼称において私から異化されているのだ、と。結局のところ、私はつねにすでに呼称に回収される＝されているのである。

またあるいはこうも言えるだろう、それは責任をとるという形での責任解除である、とも。なぜなら、私の呼称が私に先立って私に与える私の義務＝責任は、私がその呼称で呼ばれることを受け入れる＝呼称を引き受けるということと同時に私を拘束する。だがその責任は私を「として」の責任に拘束し、私を私が果たすべき「第一義的」な在り方＝責任に拘束＝限定することを通して、私を他なる在り方＝他なる責任から解除するからである。

われわれが世界を配慮し、分かり、所有し、それについて語るというのはそういうことである。語ることのできる世界はわれわれにとって既知のもの、なじみ深い、このわれわれの世界なのであり、その「そこ」でこそ私は自分の「正しい」居場所を持ち、自分の名前を持ち、「当て嵌まる」ことができる。私は他のすべての道具と共に私自身を配置し、私自身を、あるいは私の他者を「当て嵌め」ることができる。そうあって初めて私は不安なく、居場所の無い思いをすることなく、「そこ」に「いる」ことができる＝許される。そこに「いる」というのはそこにいることが「許されている」ということである。そして、そこにいることが「許されている」というのは、そこを共に（他のすべての道具と共に）構成する必要な道具的存在として「配置されている」ということ、そのもの「として」の中で承認されているということに他ならない。

こうしてわれわれは「として」の中に「当て嵌まる」。その場合の現存在の素早さ、現存在が自らいちはやくそのもの「として」自己を配置し、そのもの「として」存在するその速さは目を疑うばかりである。それはまるで、一瞬の隙もなくいちはやく「として」の構造の中に自分を一分の隙もなく当て嵌めてしまわなければ、ほんの少しの隙間、ほんの少しのはみ出した部分でもあればすぐさま私の全体が「不適切なもの」として「そこ」の適所全体性から排除されてしまうと怖れでもしているかのようだ。

実際、そうだろう。私は怖れているのだ。「として」が指示する正しい在り方、正しい道具としての適所性、「そこ」を正しく構成する「道具性」が、唯一私が「そこ」で存在することができる＝存在することを許される様式なのであるとしたら、すべての私にできることはいちはやくその中に逃げ込むこと以外にはない。脇目もふらずまわりも見ず恥ずかしい程素早く、いちはやく私はその「として」の中に逃げ込むのだが、それはそれ以外に私にはなすすべがないからであり、それは私のこの怖れがそう強いののである。

その場＝「そこ」を弁え、「そこ」を構成する道具的存在者のリストを弁え、その「そこ」を構成する道具的存在者のリストの中での私自身の「共に」の緊密な場所を弁え、その場

所に一刻も早く自分自身を投げ込まなければならないというその「そこ = da」の規範性の下で、有無をいわず私は私自身を投げ込む。私は私を投げ込む = 企 - 投する私であり、そこで企投された私は、投げ込まれた = 被 - 投的な私である。「現存在 (Da-sein) であるからには、現存在は、そのつどすでに自分を企投してしまっており、現存在が存在し続ける限り、企投しつつ存在している」(SuZ.145) のである。

現存在が存在し続ける限り、つまり私は存在し続ける限り「そこ」(da) に「いる」(sein)。私は「そこ」にいる私である。「そこにいる (da-sein)」者として以外存在様式を許されない私はあらゆる意味において「そこにいる者 = 現存在 (Dasein)」である。「そこ」が私の規範である。そしてそれが私の唯一の存在様式なのである。

だが「そこ」以外のどこに私の「いる」場所があるだろう？ そもそも「そこ」以外のどこに世界があるというのか？ 世界はすべての「そこ」で構成されているのだ。

だとすれば、私にははじめから、「そこにいる者」として以外存在様式など可能ではなかったのだ。私にははじめから、道具ではない在り方、兵隊ではない在り方などなかったのだ。兵隊であるという在り方、無数の蟻のような兵隊の集合として軍隊を現象させる以外の在り方など、私にははじめから可能ではなかったのだ。

私はいつもすでに語られている。私はいつもすでに呼ばれている。語られるという仕方で、呼ばれているという仕方で私は存在している。語りが先なのだ。語りが私に先立つのだ。私は-----全ての他の道具的存在者と共に-----いつもすでに語りに所有されているのだ。語りが私を、全ての私 = 他者を、そしてわれわれの世界を存在させていたのである。

それがすべての私とこの世界の構造である。それは語りにによって構成された緊密な揺るぎない世界である。それは語られ、既知のものにされ、われわれのものとして所有 = 共有されている。世界は、そして私も、われわれによって語られ、守られ = 拘束されているのである。こうしてわれわれはすべてを解釈された世界 (被解釈性) の中に放り込んで安心する。解釈された世界という大きなジグソーのなかにうまく嵌め込めないピースはわれわれにとって居心地の悪いノイズでしかない。知らない音、聞いたことのない声、分からない声、それらはわれわれの耳にとって他者である。それをおそらくわれわれはノイズとして聞く = 聞かないのだろう。聞かないという仕方でわれわれはその他なる声を聞く = 処理するのだろう。「正しく聞かない」ということが「正しく聞く」ということでもあるのだ。あるいはわれわれはわれわれの手で耳を塞ぐということもできるのだ・・・

だが、この余分な声、他なる声 = ノイズは、われわれ自身の声なのである。

4.

「私の傍らにはいつも一人余分の者がいる」-----と隠者は考える。「いつも 1 × 1 だが -----長い間にそれが 2 になってくる！」(Z.67)

そうツァラトゥストラは言う。

その「余分な者」とは誰か？

それは誰のまわりにもいる「多すぎる一人」なのか？あるいは孤独な隠者の庵の中に
 しかない誰かなのか？

それは誰のまわりにもいる一人なのだ、とハイデガーは言う。誰のまわりにもいて、し
 かもつきまとして決して離れない一人なのだ、と。

ハイデガーが『存在と時間』の中でただ一度だけ触れる「友」とは、おそらくこのニー
 チェの「多すぎる一人」のことである。

聞くこととは、共存在としての現存在がその他者に開放されて存在していることであ
 る。それどころか聞くことは、あらゆる現存在がたずさえている友の声を聞くことと
 して、自分の最も固有な存在しうることに対して現存在が第一次的に本来的に開放さ
 れていることをすら構成するのである。現存在は聞くのである、というのは、現存在
 は了解するからである。他者たちと共なる了解しつつある世界内存在として現存在は、
共現存在と自分自身とに「聞きつつ聴従して」いるのであり、この聴従においてそれ
 ら両者に耳を傾けつつ帰属しているのである。(SuZ.163 傍点引用者)

「あらゆる現存在がたずさえている友の声」とハイデガーは言う。

その友とは誰か？

「聞くこと」というのは「聞くこと」、つまり「その他者に開放されて存在していること」
 である、とまずハイデガーは言う。「その他者」というのはもちろん、現存在が聞く声の
 主体であろう。つまり「聞くこと」というのは聞き手が話者に「開いてあること」だ、と
 ハイデガーは置くのだ。ところがその後で、「それどころか (sogar)」と彼は続けるので
 ある。この「それどころか」は、「第一次的で本来的な開放 (die primäre und eigentliche
 Offenheit)」を導く。だとすれば、「聞くこと」が構成するのは二つの次元、二つの「開放」
 だということになる。ひとつは「第一次的で本来的」なそれであり、もうひとつは第二
 的な、おそらく日常的なそれである。そして、この二つの次元が、現存在が「聞く」二つ
 の次元での二つの他者に、「その両者」に対応するのである。その二者とは、この世界の
 中に所属するものとして現存在が「聞きつつ聴従 (»hörig«)」する二者、すなわち「共現
 存在 (mitdasein) と自分自身」である。

まず日常的な次元において、現存在が聞く＝開くのは「共-現存在」の声である。現存
 在は、「そこ (da)」に拘束される現存在 (Da-sein) 同士としての他者＝共-現存在の声を
 聞き、その言うことに従う。現存在はそれを受け入れ＝それに自らを開き＝それに自らを
 従わせる＝つまり自分を「そこ」の道具的存在者に当て嵌める。「そこ」が何の場所なのか、
 自分が何でなければならないのか、それらが「分かっている」現存在は、互いにその「そ
 こ」の規範を共有し拘束し合う。これは現存在にとって日常的な在り方である。だがそれ
 は結局のところ、現存在にとっては二次的な次元、非本来的な「聞くこと＝開くこと」で
 しかない。

これに対し、「第一次的で本来的」な「聞くこと＝開放」は、この、共に「そこ」を構成する他の部品＝「共・現存在」の声ではなく、別のところに、すなわち「自分自身」の声を聴くことの中に生起する。そして、この自分自身の声を「聴くこと」は、二次的・日常的次元でなされたような、「そこ」の道具的存在に自己を投入することではなく、「自分の最も固有な存在しうることに対して現存在が第一次的に本来的に開放されていること」を構成するとされるのである。だとすれば、この次元は、「そこ」の道具的存在様式である「として」を超えたなにか＝「自分の最も固有な存在」への「本来的な開放」として、あるいは「として」を超えることそれ自体として求められていることになる。同時にこの次元はそもそも「あらゆる現存在がたずさえている友の声を聞くこと」として開かれたのだった。だとすれば、この次元を導く「自分自身の声を聞くこと」と「友の声を聞くこと」とは同値であると解されねばならない。

導入されるのは、二つの「聞く」、二つの「声」、それによって生起する現存在の二つの在り方である。

まず<日常的次元>で、現存在は、他の現存在（共・現存在）の言うことを聞く＝従う。そして、彼らと同じ立場、つまり「そこ」を構成する一つの部品としての立場に自己を「当て嵌め」投入する。だが、反転する<第一次的で本来的な次元>において、現存在に「自分自身」あるいは「友の声」に聞き従う＝その声に自分を「聞く」可能性がひらかれる。「自分の最も固有な存在しうることに対して現存在が第一次的に本来的に開放されていること」を命ずるこの声に、現存在は、これまで部品であることの安全の中に閉鎖してきた自己を開く＝従うのである。

だとすれば、ハイデガーにおいて、いずれにせよ現存在とは、聞こえてくる声に従って自分を存在させる者であるということになる。現存在とは、単独で存在する者ではなく、声に自分を聞く者、声を聞いてその声に従う者、声と共にある者なのだ。現存在の在り方は、彼を呼ぶ声によって決定されるのである。「共・存在としての現存在」とハイデガーが言うのはその意味においてである。

あらゆる現存在はつねに、「として存在せよ」という共・現存在の声の下にいる。それは五月蠅いほど聞こえる声、日常的世界に充満しているわれわれ部品たちの声である。

だが同時に、あらゆる現存在は「友」を、あるいは「友の声」を「たずさえて (beisich tragen)」もいる。そうハイデガーは言う。つまり現存在はいつもこの「友」ないし「友の声」に付き添われてもいるのだ。

しかし続けてハイデガーは、この「友の声を聞く」ことは「可能的なこと」(SuZ.169 傍点引用者)でしかないと言う。つまりこの声が聞かれることは「可能性」に留まるのだ、と。声は聞かれないこともありうるのだ。実際、この声は、「(この声に：訳注) 随う、(この声と：訳注) 共に行く、という仕方とともに、聞かない、逆らう、反抗する、離反するという欠如的な様式をも持っている」(SuZ.163)。あるいはむしろ、現存在がたずさえているこの声は、つねに現実化しない声、「たずさえている声」に留まる声なのかもしれない・・・

聞き逃されるのはもちろん現存在がこの声を聞くことができないから、そして「聞くことができない」のは現存在にこの声を聞く能力がないから、あるいは現存在がこの声を聞きたくないからである。そして声が「聞かれない」＝「聞こえない」のは、現存在がこの声を聞くことを拒否するから、声を聞くことが現存在を引き裂くからに他ならない。

だが、聞かれない声、聞こえない声というものがありうるのか？ もし声が聞かれないとしたら、声は「ある」のか？ その声とはいったい何なのか？ その「聞かれない」という仕方と呼ぶ声とは何か。

現存在がたずさえている声、すべての現存在が聞き逃すという形式において、だが絶えずたずさえている声は次のように言う。現存在は「世人の中への喪失から自分を自分自身へと連れ戻すべきだ、つまり現存在に責めがあるのだ」(SuZ.287)、と。

声は絶えずそう言うのだ。現存在が「責めがある (schuldig)」のは、彼が彼自身を喪失したからである、と。

自分の「そこ (Da)」の中に被投されて、現存在は事実にその都度、特定の (bestimmt) 彼の「世界」へと差し向けられている。そのことと一緒に、最も身近な事実的な企投が、配慮しながらの世人の中への喪失 (Verlorenheit) によって導かれる。(SuZ.297 強調はハイデガー)

確かにそうだろう。

私はこの世界の中で「そこ」を素早く見抜き、「そこ」における私自身の呼称を、私自身の「そこ」での在り方を素早く弁えて、その存在に自分を投げ込んできた。

それはもちろんハイデガーが言うように、私自身の「最も固有な在り方」ではない。それは誰にでも「分かる」在り方、私に先立って誰にでも語られている＝所有されている在り方でしかない。だが、私は私の「最も固有な存在」が何であるかということも、またそんなものがあるかどうかということさえも考えずに、あるいは考える余地さえないままに、「そこ」の部品に自らを喪失してきたのである。呼称として現象する道具的存在としての私、呼称に回収される私は、むしろ呼称に所有されたいと望む私なのである。だがいったい、「声」が命じるような「私の最も固有な」、つまりわれわれに所有されていない、誰にも所有されていないという在り方、どんな呼称にも還元されない、どんな呼称をも拒絶するような在り方がほんとうに私に可能なのか？

さしあたり、それがこの「そこ」によって構成された世界の中で何の場所も持たないこと、「そこ」によって構成された「世界」の中で許されていないことだけは確かだろう。呼称を拒否する、それが自分のもの＝最も固有なものでないといって拒否することが、呼称の連関によって構造化される「そこ」で許されるはずがない。それがわかっているからこそ、私は「私の最も固有な存在」を探す代わりにこの「そこ」の要求する呼称＝道具的存在性の中に飛び込んで来たのだ。私は私の自由を探す代わりに私の「そこ」を確保し、私の名札を空白に＝自由にする代わりに私の名札を他者の名前で埋めてきたのだ。

それを声が責めるのである。

声は言うだろう。それはおまえの「最も固有な存在」ではない、と。そこではおまえは単なる兵隊＝駱駝でしかないのだ、と。しかもおまえは「そこ」で、自分の生き延びのために自分自身を窒息させ、自分の、本当は可能な「最も固有な在り方」を、「最も固有な在り方」におけるおまえ自身を殺しているのだ、と。「世人の中への喪失から自分を自分自身へと連れ戻すべきだ、その責任がおまえにはあるのだ」と、そう声は言うのだ。

この声をすべての現存在がたずさえている。そうハイデガーは言う。

「聞かない」という仕方、あるいは「聞き逃す」という仕方であらう耳を塞いだところで、それでも絶えずこの声は私に私の影のように伴い、絶えず私を呼ぶ。

声は私に伴う。その声は私を呼ぶ。絶えず呼んでいる。この「友」は絶えず現存在を呼ぶ。まだその声に耳を傾ける準備ができていない現存在からつねに「聞き逃」されたり「耳を塞がれたり」しながら、だが、その声は、絶えず現存在に伴い、現存在を呼ぶのである。現存在は呼ばれているのだ。たとえ彼がその声を聞かないとしても、聞こえないということにしたとしても、あるいは彼が耳を塞ぎ続けたとしてもそうなのである。

呼び声を正しく聞くことは、自分の最も固有な自己存在しうることにおける自己了解と同じことである。こうした可能性をめがけて了解しつつ自分呼び進めさせることは、現存在を呼び声に向かって自由に解放することを、言い換えれば呼びかけられることに対して用意していることを、それ自身の内に含んでいる。現存在は、呼び声を了解しつつ、自分の最も固有な実存可能性に聞きつつ聴従しているのである。
(SuZ.287)

だが現存在にとっては、その声を「聞く」ことは崖からの飛び降りである。

それは、声を「聞く」ということが、声に自らを「開く」ということ、守ってきた私の身体を、呼称の中に閉鎖して守ってきた私の身体を「開く」ということに他ならないからである。

友は呼ぶ。私を呼び続ける。

だが、いったい私に、この許されていない＝できないという形式を揺るがすことができるのか？

5.

私は多くの兵隊 (Soldaten) を見る。だが私が見たいのは多くの戦士 (Kriegsmänner) なのだ！ (Z.54)

どこに行っても現存在は、現存在であることから逃げられない。おそらく彼は、できれば逃げたいと思っているのだろう。背中を駱駝の瘤のように軋ませる背嚢を、できれば彼は下ろしたいと思っているのだろう。彼は、だが、決して自分の背嚢を下ろそうとは思わ

ないだろう。

彼は戦士ではない。

どこに行っても彼には「そこ」があるだろう。どこに行っても彼は「そこ」の中で、「そこ」の、訳の分からない規範と共現存在のうるさい叱声の中で、その重い背囊の下で黙って歩いて行くのだろう。「良い兵士」である彼は、疲れて、悲しみながら、黙って歩いて行くのだろう。

戦士は戦うことができる。彼は駱駝の労働ではなく戦士の戦い、彼自身の戦いを戦うことができる。その敵は彼自身が選んだ彼自身の敵、彼を猛らせる彼の目的である。

戦士が喜んで従う服従は、彼のあらゆる重さを取り去る服従である。彼が喜んで従う命令は、「自らの最も固有な存在であれ!」という命令、「共-現存在の声にではなく自分自身の声に従え!」、あるいは「「そこ」の規範にではなく自らの規範に従え!」という命令である。その命令は戦士に言う。「おまえは道具的存在ではなく、自ら自身であれ!」

だがそれは、戦士が「何かの軛から逃れたということではない。」(Z.77) 軛から逃げた駱駝は自由ではない。自分の軛から逃げた駱駝は、逃げた軛を引き摺り続けるだろう。自分が自分の軛から逃げたということを引き摺り続けるだろう。その鎖が、今度は新しい彼の拘束衣となるだろう。

戦士は逃げた駱駝ではなく、留まって自分の戦いを戦う戦士なのである。その戦いとは、あくまでも命令に服従するということ、このすべての「そこ」で、あらゆる規範と承認で編まれたすべての「そこ」の中で、その中で「道具的存在ではなく、自ら自身であれ!」と言う命令、「そこ」の中で「自らの最も固有な存在であれ!」と言う命令に従う、という戦いである。

彼は、「そこ」の中で、可能な承認と処罰の向こう側で----「そこ」に従ってさえいれば彼に与えられるはずの「隣人」= 共現存在の承認と、従わないことで下されるに違いない排除と処罰の向こう側で-----この途方もない命令に服従する。それは「そこ」の中で「敵」となるという戦いでもある。「そこ」に従う者たちの間で、従わない彼=戦士は敵である。

だが戦うことは敵となることではないだろうか? 「戦うためには、ひとは敵となることができなければならない」(Z.67) のだ。

どこまでも「そこ」の敵であり続けること。

従うモデルもなく、用意された居場所もなく、承認してくれる隣人たちを拒否し、書き込める自分の呼称も空白にして、それでもその「そこ」の中で、「自らの最も固有な存在であれ!」という命令に服従し続けること。別のどこかではなく、この「ここ」の中で、この「ここ」のあらゆる規範と共現存在=隣人たちの敵となりながら、あるいは「中」に逃げ込みたいと怖れる自分自身の敵となりながら、それでも「君は、君自身に君の悪と君の善を与えることができるのか? 君は、君の意志を君の上に律法として掲げることができるのか? 君は君自身にとっての裁判官であり、君の律法の処罰者であることができる

のか？」(Z.77) という問いに自らを晒し続けること。

「自分自身の律法の裁判官として、処罰者としてただ独りでいるということは恐ろしいことである。」(Z.77)

この「中」で、「外」でいるのは怖ろしいことである。どんな中にも入らず、どんな中においても外であり続けるのは怖ろしいことである。

「君自身が会おう最悪の敵は、いつも君自身だろう」(Z.78)

だが、そうだとすれば、戦士と兵隊はそれほど離れた場所にいるのではない。

6.

ツァラトゥストラは言う。

君は君自身の炎で、自分を焼き殺そうと思わなければならない。まず灰にならないとしたら、どうやって新しいものとなることを望めるだろう！(Z.78)

灰、とツァラトゥストラは言う。

まず灰にならないとしたら、と彼は言う。

灰は死者の灰である。

灰は、私が喪った私の灰、私が喪った、私の愛する者の灰である。

逃げ込んだのは私である。私を投げ込んだ、私を殺したのは私である。

そう私を責めるのは、私を喪った私自身である。あるいはそうではない在り方もできたかもしれない、あるいは逃げ込まなくてもよかったのかもしれない、あるいは私は自分をこんなにも投げ捨てなくてもよかったのかもしれない。

そう思うのは喪った私自身である。

この失った悲しみの中で、自分自身を失ったその喪の中で、背囊を下ろせ！という狂人の声がする。自分の瘤であるその瘤を下ろせ！という、声。

それは、私が喪った者の声である。背囊を背負って死んだ者の声である。それは私の、そして私の愛する者の、私が喪った私の、私を喪った私の愛する者の、死者の見開いた目、開いた口である。

死者の開いた口、永遠に黙したまま開いた口を、だがどうして私は塞ぐことができるだろう？ どうして私はその声を処理することができるだろう？ 黙した、だが開いた口に、どうして私は私の耳を塞ぐということが出来るだろう？

彼は私の死者なのだ！

私の喪は残るだろう。

喪われた者は残り続けるだろう。

そこで、そのそこではない場所で。さがすこと。私を探すこと。あなたの名を探すこと。与えられた存在において死んだ死者たちの灰の中で、私自身の口を開き、呼ぶこと。

それはおそらく世界を創造することである。

それは戦いである。維持する世界に対する、維持しようとするわれわれに対する、その中で生き延びようとする私自身の意志に対する、それは戦いである。

わたしの涙をたずさえて、君の孤独の中へ行きなさい、兄弟よ。(Z.79)

そして私は私の喪の中で、あるいは私が愛する者の喪の中で、私自身の灰の中で、はじめて、あらたに戦士であることができるのである。

* 略号は次の通りである。

Z. Nietzsche,F,Colli,C. u.Montinari,M.(Hersg), Also sprach Zarathustra, in; Nietzsche Werke VII,Berlin 1968.

SuZ. Heidegger,M., Sein und Zeit,16 Aufl.,Tübingen, 1986.

“Soldier” and “Warrior”
—— “Autonomy” in Nietzsche and Heidegger

Sachiko IGARASHI

This paper dealt with the problem of the freedom in Nietzsche. Nietzsche has two “obedience.” One is a soldier’s obedience and another is a warrior’s obedience. This paper discusses these two “obedience” from the concept of “freedom” of Heidegger.